

松山鏡

楠山正雄

青空文庫

むかし越後国松の山家の片田舎に、おとうさんとおかあさんと娘と、おやこ三人住んでいるうちがありました。

ある時おとうさんは、よんどころない用事が出来て、京都へ上ることになりました。昔のことで、越後から都へ上るといえば、幾日も、幾日も旅を重ねて、いくつとなく山坂を越えて行かなければなりません。ですから立つて行くおとうさんも、あとに残るおかあさんも心配でなりません。それで支度が出来て、これから立とうというとき、おとうさんはおかあさんに、

「しつかり留守を頼むよ。それから子供に気をつけてね。」

といいました。おかあさんも、

「大丈夫、しつかりお留守居をいたしますから、気をつけて、ぶじに早くお帰りなさいまし。」

といいました。

その中で娘はまだ子供でしたから、ついそこらへ出かけて、じきにおとうさんが帰って来るもののように思つて、悲しそうな顔もしずに、

「おとうさん、おとなしくお留守番をしますから、おみやげを買つてきて下さいな。」
「いいました。おとうさんは笑いながら、

「よしよし。その代わり、おとなしく、おかあさんのいうことを聴くのだよ。」
「いいました。」

おとうさんが立つて行つてしまうと、うちの中は急に寂しくなりました。はじめの一日や二日は、娘もおかあさんのお仕事をしているそばでおとなしく遊んでおりましたが、三日四日となると、そろそろおとうさんがこいしくなりました。

「おとうさん、いつお帰りになるのでしょうかね。」

「まだ、たと寝なければお帰りにはなりませんよ。」

「おかあさん、京都つてそんなに遠い所なの。」

「ええ、ええ、もうこれから百里の余もあつて、行くだけに十日あまりかかつて、帰りにもやはりそれだけかかるのですからね。」

「まあ、ずいぶん待ちどおしいのね。おとうさん、どんなおみやげを買つていらっしやる

でしよう。」

「それはきつといいものですよ。楽しみにして待つておいでなさい。」

そんなことをいいいい、毎日暮らしているうちに、十日たち、二十日たち、もうかれこれ一月あまりの月日がたちました。

「もうたんと、ずいぶん飽きるほど寝たのに、まだおとうさんはお帰りにならないの。」
と、娘は待ち切れなくなつて、悲しそうにいいました。

おかあさんは指を折つて日を数えながら、

「ああ、もうそろそろお帰りになる時分ですよ。いつお帰りになるか知れないから、今のうちにおへやおそうじをして、そこらをきれいにしておきましょう。」

こういつて散らかつたおへやの中を片づけはじめますと、娘も小さなほうきを持つて、お庭をはいたりしました。

するとその日の夕方、おとうさんは荷物をしよつて、

「ああ、疲れた、疲れた。」

といいながら、帰つて来ました。その声を聞くと、娘はあわててとび出して来て、

「おとうさん、お帰りなさい。」

と良かったです。おかあさんもうれしそうに、

「まあ、お早いお帰りでしたね。」

といいながら、背中の荷物を手伝つて下ろしました。娘はきつとこの中にいいおみやげが入っているのだろうと思つて、にこにこしながら、おかあさんのお手伝いをして、荷物を奥まで運んで行きました。そのあとから、おとうさんは脚絆のほこりをはたきながら、「ずいぶん寂しかったろう。べつに変わったことはなかったか。」

とおいしい奥へ通りました。

おとうさんはやつと座つて、お茶を一杯のむ暇もないうちに、包みの中から細長い箱を出して、にこにこしながら、

「さあ、お約束のおみやげだよ。」

といつて、娘に渡しました。娘は急にとろけそうな顔になって、

「おとうさん、ありがとう。」

といいながら、箱をあけますと、中からかわいらしいお人形さんやおもちやが、たくさん出てきました。娘はだいじそうにそれを抱えて、

「うれしい、うれしい。」

と行って、はね回^{まわ}っていました。するとおとうさんは、また一つ平^{ひら}たい箱^{はこ}を出^だして、
「これはお前^{まえ}のおみやげだ。」

と行って、おかあさんに渡^{わた}しました。おかあさんも、

「おや、それはどうも。」

といいながら、開^あけてみますと、中には金^{かね}でこしらえた、まるい平^{ひら}たいものが入^{はい}っていました。

おかあさんはそれが何^{なん}にするものだからないので、うらを返^{かえ}したり、おもてを見^みたり、ふしぎそうな顔^{かお}ばかりしていますので、おとうさんは笑^{わら}い出^だして、

「お前^{まえ}、それは鏡^{かがみ}と^みいて、都^{みやこ}へ行^いかなければ無^ないものだよ。ほら、こうして見^みてごらん、顔^{かお}がうつるから。」

と^いいて、鏡^{かがみ}のおもてをおかあさんの顔^{かお}にさし向^むけました。おかあさんはその時^{とき}鏡^{かがみ}の上^{うへ}にうつった自^じ分^{ぶん}の顔^{かお}をしげしげとながめて、

「まあ、まあ。」

と^いっていました。

二

それから幾年かたちまりました。娘もだんだん大きくなりました。ちょうど十五になったとき、おかあさんはふと病氣になつて、どつと寝込んでしまいました。

おとうさんは心配して、お医者にみてもらいましたが、なかなかよくなりません。娘は夜も昼もおかあさんのまくら元につきつきりで、ろくろく眠る暇もなく、一生懸命にかんびようしましたが、病氣はだんだん重るばかりで、もう今日明日がむずかしいというまでになりました。

その夕方、おかあさんは娘をそばに呼び寄せて、やせこけた手で、娘の手をじつと握りながら、

「長い間、お前も親切に世話をしておくれたが、わたしはもう長いことはありません。わたしが亡くなったら、お前、わたしの代わりになつて、おとうさんをだいじにして上げて下さい。」

といいました。娘は何ということもできなくつて、目にいっぱい涙をためたまま、うつむいていました。

その時おかあさんはまくらの下から鏡を出して、

「これはいつぞやおとうさんから頂いて、だいじにしている鏡です。この中にはわたしの魂が込められているのだから、この後いつでもおかあさんの顔が見たくなったら、出してごらんなさい。」

と、鏡を渡しました。

それから間もなく、おかあさんはとうとう息を取りました。あとに取り残された娘は、悲しい心をおさえて、おとうさんの手助けをして、おとむらいの世話をまめまめしくしました。

おとむらいがすんでしまうと、急にうちの中がひっそりして、じつとしていると、寂しさがかみ上げてくるようでした。娘はたまらなくなつて、

「ああ、おかあさんに会いたい。」

と独り言をいいましたが、ふとあの時おかあさんにいわれたことを思い出して、鏡を出してみました。

「ほんとうにおかあさんが会いに来て下さるかしら。」

娘はこういいながら、鏡の中をのぞきました。するとどうでしょう、鏡の向こうにはお

かあさんが、それはずっと若い美しい顔で、にっこり笑っていらっしやいました。娘はぼうつとしたようになって、

「あら、おかあさん。」

と呼びかけました。そしていつまでもいつまでも、顔を鏡に押しつけてのぞき込んでいました。

三

その後おとうさんは人にすすめられて、二度めのおかあさんをもりました。

おとうさんは娘に、

「こんどのおかあさんもいいおかあさんだから、亡くなったおかあさんと同じように、だいいじにして、いうことを聴くのだよ。」

といいました。

娘はおとなしくおとうさんのいうことを聴いて、

「おかあさん、おかあさん。」

「いつて慕したいますと、こんどのおかあさんも、先せんのおかあさんのように、娘むすめをよくかわいがりました。おとうさんはそれを見みて、よろこんでいました。」

それでも娘むすめはやはり時々ときとき、先せんのおかあさんがこいしくなりました。そういう時とき、いつもそつと一ひと間まに入はいって、れいの鏡かがみを出だしてのぞきますと、鏡かがみの中にはそのたんびにおかあさんが現あらわれて、

「おや、お前まえ、おかあさんはこのとおり達たつ者しやですよ。」

というように、につこり笑わらいかけました。

こんどのおかあさんは、時々ときとき娘むすめが悲かなしそうな顔かおをしているのを見みつけて心しん配ぱいしました。そしてそういう時とき、いつも一ひと間まに入はいり込こんで、いつまでも出てこないのを知しって、よけい心しん配ぱいになりました。そう思おもって娘むすめに聴きいても、

「いいえ、何なんでもありません。」

と答こたえるだけでした。でもおかあさんは、何なんだか娘むすめが自分じぶんにかくしていることがあるように疑うたぐって、だんだん娘むすめがにくらしくなりました。それである時ときおとうさんにその話はなしをしました。おとうさんもふしぎがって、

「よしよし、こんどおれが見みてやろう。」

といつて、ある日そつと娘の後から一間に入つて行きました。そして娘が一心に鏡の中に見入っているうしろから、出し抜けに、

「お前、何をしている。」

と声をかけました。娘はびつくりして、思わずふるえました。そして真っ赤な顔をしなから、あわてて鏡をかくしました。おとうさんはふきげんな顔をして、

「何だ、かくしたものは。出してお見せ。」

といいました。娘は困つたような顔をして、こわごわ鏡を出しました。おとうさんはそれを見て、

「何だ。これはいつか死んだおかあさんにわたしの買ってやった鏡じゃないか。どうしてこんなものをながめているのだ。」

といいました。

すると娘は、こうしておかあさんにお目にかかっているのだといいました。そしておかあさんは死んでも、やはりこの鏡の中にいらして、いつでも会いたい時には、これを見れば会えるといつて、この鏡をおかあさんが下さったのだと話しました。おとうさんはよいよふしぎに思つて、

「どれ、お見せ。」

「といいながら、娘のうしろからのぞきますと、そこには若い時のおかあさんそっくりの娘の顔がうつりました。」

「ああ、それはお前の姿だよ。お前は小さい時からおかあさんによく似ていたから、おかあさんはちつとでもお前の心を慰めるために、そうおっしゃったのだ。お前は自分の姿をおかあさんだと思つて、これまでながめてよろこんでいたのだよ。」

「こうおとうさんはいいながら、しおらしい娘の心がかわいそうになりました。するとその時まで次の間で様子を見ていた、こんどのおかあさんが入つて来て、娘の手を固く握りしめながら、

「これですつかり分かりました。何というやさしい心でしょう。それを疑つたのはすまなかつた。」

「といいながら、涙をこぼしました。娘はうつむきながら、小声で、

「おとうさんにも、おかあさんにも、よけいな御心配をかけてすみませんでした。」
 といいました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松山鏡

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>